A 159　青年期の食生活に関する研究　（その２）

試験紙法による味覚感度とその要因

東筑紫短大　○納身節子　田代桂子

目的　演者らは味覚テストの方法論の研究として集団に対するテストを行いその結果を分析し既に発表した。近年、食塩摂取についての問題が成人病予防との関係で重視されてWHOでは、正常人１日３～５gと定められている。そこで塩味嗜好と食塩摂取量の定量を集団で正確に把握する必要があるが容易でない。今回は、味覚テストのテストペーパーに改良を加え、集団としての塩味感度を検索する研究を行った。あわせて対象を青年期におき、その食生活が味覚の感度に影響をおぼすという仮説をたて研究を行った。学生を対象とし、味覚識別テストといくつかの客観的要因との関係を検討した。

方法　対象者：その１に同じ

味覚識別テスト：味の識別能力をテストする方法として試験紙を用いた。

a）味覚テスト試験紙の呈味物質と濃度：テストペーパーを今回は塩味に濃度差をつけたものを含めた14枚を用いた。

b）味覚テスト試験紙の組合せと味わう順序：４原味中塩味を除く３原味の組合せを４グループに別け各々のグループに濃度差をつけた塩味を組合せ、味覚の疲労や、前の味の残存効果などの誤差の消去を考えた。

結果　味の識別テストの結果とその要因について正解率と検定を行った。